

一般質問

藤井学昭

「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃事業概要」にあつて、「是梅陀羅」問題がその重点教化施策に入っていないのはなぜか教えてください。2017年度の教区学習会資料、「是梅陀羅」諸課題への取り組みに関するロードマップ（案）では、2023年4月の慶讃法要厳修までの検討課題が七つ列記されていました。慶讃法要までのロードマップまで作成したわけですが、現在もその計画は変わりませんか。その一々の課題と実動に移す具体的内容及び計画を示してください。

私は、大谷派教団が水平社創立より提起されている、お経を聞くと「心に痛みを感じる」との「是梅陀羅」問題こそ、慶讃法要の中心にすべき課題ではないかと考えています。差別が当たり前とされてきた多くの人々にとって、「われら」と語りきる親鸞聖人だからこそ信順しご門徒になられたのでしょうか。しかし、同じ親鸞聖人を語りながら、伝覚如「十三箇条掟書」なるものが初期本願寺教団ではすでに成立し、蓮如による教団拡張を経ながら証如・顕如と「門跡」を欲しがる貴族意識は頂点に達し、本末制度で法主を頂点とする「貴族あれば賤族あり」という非真宗化ともいえる教団を構築しました。昨年質問した寺中問題につながりますが、その後の展開と取り組みはどうなりましたか。また、その答弁では「様々な差別問題」といわれましたが具体的にどのような事例を考えているかお聞かせください。その本願寺教団を成り立たせる親鸞教学を営々と積み上げてきたわけです。清沢満之の流れにある近代教学を名のる同朋会運動の今の今までも、部落問題を問い返し差別を超える「仏教の平等なる精神」を語る教学など、ついぞなかったのかもかもしれません。

先日求めたご本（「共に悩む身となりうるか」武内了温師五十回忌法会報告誌）に、「真宗の信心の中に、差別を温存し助長するというような消極的な意味ではなく、むしろもっと積極的な意味で差別を形成し差別を永続化していくような真宗の信心の質があるのではないか」（藤元正樹）と指摘されています。お経を聞くと「心が痛い」との声に、その「信心の質」しか持ち得なかった私は、是非とも新たな「教学」を生み出す糸口だけでも得たいのです。

さきの宗務総長演説では、「教学会議 諮詢事項2に対する指針(報告)」が取り上げられましたが、「是梅陀羅」読誦については公議公論の場で議論してほしいと議会に丸投げです。その指針（報告）を議会前に公開しないといけないのじゃないですか。いつ「真宗」誌に公開されますか。宗会議員には添付された女性室並び解推と教研からの報告書も「真宗」誌に同時掲載されるか教えてください。

また、「課題の共有と課題を学ぶ」ことが何度も強調されますが、水平社創立以来「再々にわたって」語られた「共有と学び」が、百年たっても何故出来ないのか何故すぐ忘れるのか。今回の総長演説でも語られる「課題の共有」へどのようにアプローチするのかお示してください。先送りやなかったことにしないようその覚悟が聞きたいのです。なお浄土教典を大切にされる他教団にも呼びかけ「是梅陀羅」問題の共有が図れないか提言と質問といたします。その先導役に大谷派がなりませんか。

そして、「僧侶である我々一人ひとりに罪がある。経典の読誦については、課題を自覚した僧侶一人ひとりが経典にどう向き合うかという問題に収斂される」等々。「重大な課題」が一人ひとりに罪があると個人の問題に収斂されるがそうなのか。私たちは、経典を「本来の意味を誤解」し安易に権威化したのではなく、差別を形成し永続化せしめる「教学」だからこそ、再々にわたって呼びかけられても、その「教学」では気づけないのです。部落差別や女性の視点で、時代の課題を背負って経典を読み込んでいく、新たな大谷派の「教学」を打ち立てませんか。全国に呼び掛けましょうよ。

最後に、教学会議から諮詢事項2の指針(報告)が出たのが2018年10月です。11月には人権ギャラリー展「経典に表れた女性差別」に関わるパネル差し替え事件が起きました。

教学会議では、「痛み」の声が生活の現場、特に女性から上がっているとして、女性室から「聖教に見る性差別言辭の検証—『御文』における性差別言辭並びに拝読について—(中間報告)」、並びに解推と教研からは「経典及び親鸞聖人著作に見られる障害者への差別表現について」を提出させています。それを受けての指針(報告)では、「宗門として問題意識を深めるための共同学習に取り組まなければならない課題である」と結論されています。その提出一ヶ月後に、ギャラリー展という共同学習の場で「経典に表れた女性差別」を問うパネル差し替えが行われた事実は、なんと嘆かわしいことでしょう。その経過と理由を明らかにしてください。以上質問を終わります。